愛媛県生涯学習センター所長賞　壁新聞部門
「−住友の煙害問題に立ち向かった−伊庭　貞剛」
新居浜市立船木中学校　第３学年　勝田　翠

−住友の煙害問題に立ち向かった−

伊庭貞剛

(1847 − 1926)

[きっかけ]

一昨年、広瀬宰平について調べた時に別子銅山に関わりのある人だと知って調べてみようと思った。そして、一昨年行けなかった日暮別邸に行ってみて、四阪島での出来事や伊庭貞剛が行ったことについてよくわしく知りたいと思ったので調べることにした。

四阪島と煙害克服の歴史

明治16年	1883	惣開製錬所(のちに新居浜製錬所)着工
明治21年	1888	惣開製錬所操業開始
明治26年	1893	新居浜製錬所本格操業開始 新居浜の煙害問題が表面化
明治28年	1895	四阪島を買収
明治30年	1897	四阪島製錬所着工
明治33年	1900	新居浜製錬所大煙突完成
明治34年	1901	四阪島製錬所建設を2年間延期許可申請
明治35年	1902	四阪島製錬所建設工事再開
明治38年	1905	四阪島製錬所本格操業開始 煙害が東予地域一帯に拡散 越智郡桜井村(現今治市)に硫煙試験場開設
明治39年	1906	日暮別邸完成・四阪島製錬所落成式
明治41年	1908	四阪島煙害で相次ぐ農民蜂起
明治42年	1909	住友と農民代表による煙害問題交渉 合意に達せず
明治43年	1910	第1回煙害協議会が開催 第1回賠償契約成立
大正2年	1913	新居浜に住友肥料製造所開設
大正3年	1914	六本煙突完成するも煙害は更に拡大
大正9年	1920	東予でのむ重選鉱開始に伴う硫化鉱の販売開始
大正10年	1921	四阪島製錬所の大改造工事着工(大正14年完成)
大正11年	1922	海底ケーブル敷設工事完成
大正13年	1924	四阪島製錬所大煙突完成(高さ64m)
大正14年	1925	星越山に洋燃屋鉱場完成
大正15年	1926	コットレル式電気集塵装置設置
昭和3年	1928	ペテルゼン式硫酸工場着工 (昭和4年第1期、昭和5年第2期完成)
昭和12年	1937	中和工場着工、日暮別邸館増築
昭和14年	1939	中和工場完成 最後の煙害協議会開催、煙害問題完全解決
昭和29年	1954	生鉱吹製錬法開始に伴い中和工場中止
昭和34年	1959	硫酸工場を新ペテルゼン式に改造
昭和46年	1971	東予製錬所完成により四阪島での銅製錬操業縮小
昭和51年	1976	四阪島での銅製錬終結
昭和52年	1977	四阪島での粗酸化亜鉛操業開始
平成22年	2010	株式会社四阪製錬所
平成25年	2013	四阪島の大煙突解体
平成30年	2018	日暮別邸を新居浜市内の星越山に移築

−環境対策の先駆者−

弘化4年(1847)1月5日、伊庭貞剛は近江代官(滋賀県)貞隆の長男として生まれる。大阪上等裁判所判事を明治12年(1879)1月に退職するが、2月4日、叔父広瀬宰平の勧めにより住友入社。明治13年5月1日大阪本店支配人となる。明治27年、農民の煙害問題を解決するため、別子支配人を志願。翌年には、煙害問題解決のため山根製錬所を閉鎖、さらに翌年には新居浜製錬所の四阪島移転を決定する。また、本格的造林事業を計画断行し、毎年100万本以上の植林を別子の山に行う。まさにわが国の環境対策の先駆者であった。そして、明治33年2代目住友総理事に就任する。

[煙害問題]

製錬事業の拡大によって、別子銅山では、1884年に新居浜の惣開に洋式の製錬所を、1888年に湿式製銅を採用した山根製錬所を建設していたが、製錬時に排出される亜硫酸ガスが農作物に被害を与えた。1894年に惣開で本格的な洋式製錬が開始されると被害は深刻化し、地元から県庁に陳情が行われたほか、農民による暴動も発生した。

解決に向けて

この煙害問題を解決するために、別子支配人として派遣されたのが伊庭貞剛であった。伊庭は、山根製錬所の操業を中止するとともに、抜本的な対策として惣開製錬所を四阪島へ移転することを決定した。四阪島は新居浜沖の20kmの無人島で、移転に要する費用は50万円と見積もられたが、実際の総工事費は173万円に膨れ上がった。煙害解消の役割を担い、巨額を投じて建設された四阪島製錬所であったが、その期待に応えることはできなかった。

1905年1月に四阪島製錬所が本格操業を開始すると、たちまち対岸の村々で被害の声が上がった。ここに至って住友は、有害物質を出さないという根本的な解決策を決断する。つまり、製錬時に発生する亜硫酸ガスを抑制するため、硫化鉱から硫酸を製造し、その硫酸を原料として過燐酸石灰を生産する計画である。これにより、煙害を防止できるだけでなく、農家に安い肥料を提供することが可能になり、農業への貢献にもつながる。

この計画を実行するために開設されたのが住友肥料製錬所である。

[別子山の植林事業]

伊庭は、煙害や伐採により荒げ山となっていた別子銅山周辺の植林事業にも力を注いだ。産銅量の増加につれて、薪や木炭、坑木などに大量の樹木が消費されており、それまでも年平均6万本ほどの植林が行われていたが、1894年から檜や杉の植林数を増やし、1897年に100万本、1901年には200万本を超えるまでになった。

伊庭は、「別子金山を旧のあをあをとした姿にして、之を大自然に戻さなければいけない」と述べた。

(別子植林本数)

日暮別邸

別子銅山は元禄4年(1691)に開坑されたが、増産対応のため、排出される亜硫酸ガスが大気圏の農作物に被害を与える煙害は深刻化していった。そのため、四阪島へ移転するという経営としての決断をした。「日暮別邸」は、四阪島製錬所が操業を開始した翌年の明治39年(1906)に、当時の住友家第15代当主友純の命により住友家の別邸として四阪島に建設された。その土地は、製錬所を見通せる場所であり、煙害克服に対する当主としての強い関心の現れである。たともいわれている。その後、煙害をなくすための関係者による様々な対応が重ねられ、昭和14年(1939)に煙害は完全解決された。四阪島は住友の歴史を語る上で欠くことのできない地であるといわれている。

○鍰レンガ

鉱石から銅や銀などの金属を取り出した後の残渣を鋼型で煉瓦状に固めたもの。成分は50%以上が酸化鉄のため、同じ大きさの石よりもはるかに重い。四阪島では建物の壁面、護岸整理などの用材として広く使われた。

○大煙突モニュメント

大正13年、四阪島製錬所に、底部内径9.7m、高さ64mのコンクリート製の大煙突が建設された。煙害問題解決後も、長きに渡り瀬戸内海のシンボルとして人々に親しまれていたが、平成25年7月に老朽化のため解体。このモニュメントは、当時の大煙突の底部の大きさを縮レンガで模したもの。

○ミゼット消防車

昭和38年頃、四阪島には消防団の宮窪町第九分隊ができ、消防車も配置されていた。消防車には、坂道が多く道幅も狭い島内で小回りの利くミゼット車が採用され、防火管理に一翼を担っていた。島内は私有地のため、ナンバープレートは必要なかった。

伊庭貞剛略年表

弘化4年(1847)1月
5日、貞隆・田鶴の長男に生まれ近江国西宿村(現在の滋賀県近江八幡市)で育つ。幼少の頃より児島一郎道場で剣道を学び、また、西川吉輔に師事し尊皇思想を学んだ。

明治元年(1868)1月
師西川吉輔の求めに応じて京都御所禁衛隊に属し、その後司法局検事、函館裁判所副所長、大阪上等裁判所判事などを歴任。

明治12年(1879)2月
叔父広瀬宰平の勧めで住友に入社。

明治13年(1880)5月
大阪本店支配人となる。

明治23年(1890)7月
滋賀県選出初の衆議院議員となる。

明治27年(1894)7月
別子支配人として単身赴任。

明治27年(1894)11月
初代住友総理事広瀬宰平の引退に伴い、別子支配人在勤のまま その地位を引き継ぐ。

明治33年(1900)1月
2代目総理事に就任。
明治28年から引退までの伊庭は住友銀行、住友伸銅場、別子銅山林課、住友倉庫などを設立。また、煙害問題解決のため断行した四阪島製錬所の建設と、別子山の植林事業は永遠に語り継がれる事業である。

明治37年(1904)7月
「事業の進歩発達に最も害をするものは、青年の過失ではなく、老人の跋扈である」と与謝の句で引退。その後は石山の別荘泡幾園に隠棲。

大正15年(1926)10月
23日、80歳で没。伊庭家墓所埋葬。

[日暮別邸館内]

[感想]

私は、今回調べるまで伊庭貞剛についてほとんど知らなかったけど、伊庭貞剛の活躍で今、新居浜が過ごしやすくなっていると思いました。今回は、一昨年訪れることができなかった日暮別邸に実際に行ってみて、日暮別邸や四阪島の歴史に触れることができました。伊庭貞剛は新居浜に深く関わっていて、煙害問題解決や別子銅山の植林など色んな環境問題に携わっていてすごいと思いました。

参考文献
日暮別邸記念館 パンフレット
伊庭貞剛−別子金山を旧のあおあおとした姿に−
住友化学100年のあゆみ
伊庭貞剛その11住友の歴史

座右の銘「君子財を愛す、これを取るに道有り」

船木中学校 3年 勝田 翠